

1 学校の状況と地域の実態

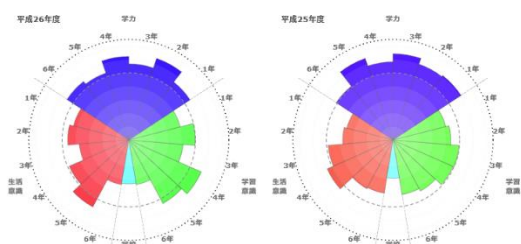
- (1) 授業研究を中心とした教員の研究・研修は定着してきている。今年度も国語を中心とし、仮説を位置付けたテーマに即した研究活動を工夫し、授業力の向上につとめている。
- (2) 4割程度が教職経験10年未満の職員であり、学年・全校組織として教科指導・児童指導について研究・研修を行い、基礎的な指導技術をより一層身に付ける必要がある。
- (3) 全職員で特別な教育的支援が必要な子どもへの共通理解を図りながら、対応・支援にあたっているが、特別支援教育的な視点からのより充実した体制づくりにつとめている。
- (4) 子どもたちの一日の家庭の勉強時間が30分以下の子どもが4割以上、一日の読書量10分以下の子どもも4割以上と家庭学習は活発とはいえない。
- (5) 地域のボランティアの方がとても熱心で「まちの先生」として計画的に授業に積極的に参加してもらっている。学校・家庭・地域との連携による学習を推進する努力をしている。

2 今後3年間の方向（中期学校経営方針）

(2) 学力向上に関する指導の目標・方針（平成27年度末の姿）

- 言語活動を中核に据え、自分の考えを表現したり、人の考えを受け入れたりする主体的な学習の充実により、思考力・判断力・表現力の育成が図られるとともに、市学力学習状況調査の標準化得点が向上しています。
- 特別な教育的支援が必要な子どもの在籍する学級において安定した授業ができる指導技術を教師が身に付けています。
- 研修・研究時間を確保し、実践的な研修・研究を組織的に行っています。

3 横浜市学力学習状況調査等からの平成27年度の実態把握



(1) 学力の概要と要因の分析

学力は、全学年で横浜市の平均値を上回る水準にある。学力が高い学年では、学習意識や生活意識も高い傾向があり、今後も、子どもたちが主体的に学習に取り組めるような授業改善を継続していくことが学力向上につながると考える。

(2) 教科学習の状況

- 国語科：全般的に市平均値より高い一方、学力層Dに当たる児童の割合が増加している傾向がある。
- 算数科：全般的に市の平均値的以上で、特に「知識・理解」では全学年で上回っている。
- 社会科：観点別に見ると「資料活用の技能」が全体的に高い一方、「知識・理解」の割合が低い。
- 理科：全般的に市の平均値を上回っている。観点で比較すると「技能」の割合が若干低い。

(3) 経年変化の状況と要因の分析（学習・生活意識調査も含めて分析）

26年度も各学年、市平均より学力が上回っているが、経年変化を見ると、学力が向上したといえる学年がある一方、下回ったと判断する学年も見られる。学力が下回ったと判断する学年では、学力層C、学力層Dに当たる児童が増加している傾向があるため、学力の二極化が進んでいると判断できる。授業の中において、学力層に応じたきめ細かな指導の必要性が浮き彫りとなっている。

学習意識においては、「学習が好きである」と答えた児童の割合が、市の平均を上回る学年が多いことから、学習に前向きに取り組んでいる児童が増加していることがうかがえる。

生活意識に目を向けると、昨年と同様に、市の平均を下回る結果となっている。その一方、「自分にはよいところがある」と答える児童の割合が、学年が上がるごとに増加する傾向が見られ、学校生活の中で、自己肯定感を醸成できていると判断できる。

以上のことから、主体的な学習を目指し、学習過程を子どもたちにとって問題解決的な学習過程にするようにし、子どもたちが本気の思いをもって学習に取り組めるようにする。また、楽しみながら学習に取り組む中で、力を身に付けさせる必要がある。そこで、交流の場面の充実を図ること、振り返りを重視して子どもたちが身に付けた力を自覚できるようにしていく。

4 平成27年度 目標と具体的方策

平成27年度 目標

「自らの課題解決に向け、「ひと・もの・こと」にはたらきかけ、いきいきと表現する子の育成」
～主体的な学習の中で、ことばの力を身に付けさせる「仕掛け」の具体化～

(1) 学校組織としての共通の取組

- **言語活動の充実**
 - ・授業の中につけたい力に適した言語活動（説明、報告、記録、対話、討論など）を位置付け、自分の考えを表現、交流できる授業を行う。
 - ・ICTを活用し、自分の考えを表現したり、発表したりする授業を行う。
- **スキルタイムの充実**
 - ・つけたい力に適した学習内容を学年で検討し、計画的に実施する。
- **特別支援教育の充実**
 - ・全学年ですっきりとした学習環境をつくり、「学習の流れ」「見通しをもった授業構成」を協同して研究・実践していく。
 - ・発達障害等に関わる理論研修会を年2回程度実施するとともに、特別な教育的支援が必要な子どもを想定した模擬授業を通して、指導技術を習得する実践的な研修を年1回以上行い、指導法の工夫改善を実施する。
- **研修・研究会の時間の確保と内容の充実**
 - ・会議の持ち方を見直し、経験者が若手教員を指導すると共に、互いに指導力を高め合う研修・研究の時間と場を確保する。

(2) 学年・教科等としての取組

○ 言語活動の充実

1 学年

- 国語科等で、説明する文章、紹介する文章を書くなど、表現活動を大切にするとともに、できる限り対話やペア学習をする場を位置付ける。
- 分からないこと、詳しく知りたいことを尋ねたり、気持ちを表情や態度、言葉で表したりしながら対話する。

2 学年

- 国語科等で、自分の経験したこと、観察したことなどについて相手を意識して報告する文章や説明する文章を書くなど、表現活動を大切にするとともに話し合いをする場を位置付ける。
- 大事だと思った点を確かめたり、関連した情報を提供したりしながら話し合う。

3 学年

- 社会科等で見学・調査したことを説明する文章、記録する文章を書くなど、表現活動を大切にするとともに、話し合いをする場を位置付ける。
- 国語等で理由や根拠を尋ねたり、まとめたり補足したりしながら話し合う。
- 列挙したり、順序を付けたりして考える学習を計画的に行う。

4 学年

- 算数・理科等で説明する文章、記録、報告する文章を書くなど、表現活動を大切にするとともに、話し合いをする場を位置付ける。
- 反対の意見をだしたり、相手の考えを取り入れ自分の考えを述べたりしながら話し合う。
- 順序を付けたり関連付けたりして考える学習を計画的に行う。

5 学年

- 総合的な学習等で説明する文章、意見を述べる文章を書くなど、表現活動を大切にするとともに、話し合いをする場を位置付ける。
- 相手の話を一般化したり、経験を加えて拡張したりしながら話し合う。
- 関連付けたり、分類・整理したりして考える学習と振り返りを行う。

6 学年

- 教科等の学習で今まで身に付けた様々な力を自覚的に生かすことができるようにするとともに、話し合いをする場を位置付ける。
- 曖昧な点を明確にしたり、違った視点を打ち出したりしながら話し合う。
- 関連付けたり、分類・整理したり、多面的に考えたりする学習をし、振り返りを行う。

個別支援学級

- 個別の教育支援計画・個別の指導計画に基づき、話し言葉、表情、仕草、書き言葉等、発達段階に応じた適切なコミュニケーション手段を積極的に活用する場を設けるようにする。
- 子どもの発達段階に応じて、各学年の取組を参考にし、必要な取組を行うようにする。
- 子どもに応じたわかりやすい情報発信をするなど言語環境の整備を行うようにする。